

「図書新聞」

2012. 3/3 (土)

J・C・マルタン著『フェルメールとスピノザ』を読む

▼ジャン・クレマール・マルタン著、杉村春彦訳『フェルメールとスピノザ』(永遠の公式)12月15日刊、四六判、一〇六頁、本体八〇〇円以上、文芸春秋

「スピノザ的生き方」が要求するものとは

「永遠」の概念の「実践的読み方」を提案

塚原 史



本書は、その魅力的な表題が「エチカ」で展開してみせが示すとおり、一七世紀オランダの哲学者と画家の仮想的な「幾何学的・光学的イメ

が「エチカ」で展開してみせが示すとおり、一七世紀オランダの哲学者と画家の仮想的な「幾何学的・光学的イメ」を通過し、光線が描き出す世界像(鏡)のなかろ。こころは視角から、著者は「これが私の身体」とスピノザが言える、これが私の魂とフェルメールが絵筆を

り、暗室を使用していたフェルメールが「似ていない肖像画」を描くはずはない。から、著者の推理は「ほうごんな説得力がある。つまり、一六六五年頃、当時三〇代前半の若き画家と哲学者は科学者

ば、昨秋刊行されたミシェル・オンフレの著書『絶対的自由の秩序 アルベール・カミュの哲学的人生』が想起される。その最初の方で、オンフレは「哲学教授は哲学で生きているが、哲学者は哲学を生きている」と述べてから、「書いていた」教授の人生は職業の時間割に従う言葉の人間スピノザを教えた

が。もちろん、この場で答える出さずな疑問ではないが、おそく「スピノザ的生き方」が要求しているのは、杉村氏が強調された本書の「実践的読み方」に通じる「新たな世

評者は、曲解したくなる。フェルメールとスピノザの出会いが、たゞ仮想的なものであつたとしても、現代にながる思想と芸術の豊饒な展開の可能性を秘めていることであらう。気づかせてくれる好著・好訳である。(義教文化論・現代思想)